

Fate/Grand order 可能性の獣

CLOSEEVOL

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は元々は一般人だつただが彼はある女の子を庇い死亡する

そして彼はFate/Grand Orderの世界に転生しバナージ・リンクスと
して生きる

目

始まる物語

始まる原作

次

8 1

始まる物語

「まさか、まだ売つてるとはなあ♪ユニコーンガンダムのプレミアムグレードもう手に入らないと思つていたがラツキー♪」

俺の名は壱馬一角どこにでもいる高校生だ、運動はそこそこできる、学力も普通だがそんな俺には好きなものがあるガンプラだ！特にユニコーンが好きだ！いやーこれを買う為にバイト増やしたかいがあつたな

「さてと組み立ては時間がかかるけど頑張るか」

そうなことを思い俺は家へ向かう——だがこれが俺の最後のガンプラの買い物になるのは俺は知る由もなかつた

「ふん、ふん♪」

俺はユニコーンのプレミアムグレードが買えたことに喜び、鼻歌をしていた
そしたら

「いって！」

「いたた、あ！ごめんなさい！」

俺は同じぐらいの歳のの女の子と横断歩道でぶつかり体型を崩す

「前見てなかつた俺も悪いから」

「そうですかでは」

俺はそういう横断歩道を渡り切ろうとしたとき、さつき当たつた女の子にトラックが
「！」

俺は無意識に走っていたユニコーンのプレミアムグレードの箱の入つた袋を投げ

「危ない！」

ドゴツ！

「え？」

バンッ！

俺は彼女をかばい全身に強い衝撃が走る

「大丈夫ですか！ 誰が救急車を！」

俺は彼女の言葉を最後に意識を失つた——次に目を覚ましたのはベットの上だつた
「ん～あれ？ ここは？」

だがそこは自分には見覚えのない部屋だつた、だが何故俺はこの部屋を知つてゐる。

「まさかと思うが、転生したのか」

よくラノベの小説、または二次創作にある転生ものか……まさか自分の身で体験することになるとはな

そんなことを考えていると、自分の部屋にノックの音が響き渡る

「起きてる？ バナージ？」

「起きてるよ、母さん」

俺は返事をするん？ あれ空耳か？ 今、バナージて聞こえたような？

「朝食はできてるから、顔を洗つてきなさい」

「わかつたよ母さん」

俺は母さんの言われ、洗面台へ目指すそして水を出し洗面器に水をため、顔を洗う。

冷たい水が顔へときて一気に眠気が飛ぶこれをあと一回やつたあとタオルを取り、顔を拭くそして鏡を見たとき衝撃が走った

「これは…っ」

俺の顔いや、俺の体は――

――バナージ・リンクスを同じ体になつていた

あれから十一年の時が流れたえ？ 飛ばし過ぎだつて？ こうでもしないと長くなるか

ら、メタい話は置いといて。

俺はバナージとしてこの世界に転生した最初は驚いたがすぐに対応した、ただ一つ驚いたのはオフェリアと言う人物がいたことである。オフェリアはFate/Grand Orderに登場する人物なんだけえ？なんで知ってるのかって？やつてたらあと、二次創作で彼女がヒロインの作品があつたから。

話を戻そう彼女は俺の同い年だつたが彼女は引っ越してしまつた。

実は俺の両親はカルデアの建設に関わっていたことがわかつた、前々から力をつけたいと思つていが今の自分には何もできないと思い、諦めていただがその日俺は夢を見た本物のバナージさんに会う夢をそして俺は託されたユニコーンガンダムを。

その後は特訓だつた、攻撃の仕方、格闘やビームマグナム、ビームマシンガンの使い方。夢だつたけど長い夢だつた。

しばらくすると俺はニュータイプに覚醒した、その後俺はバナージさんに「もう教えることはない」と言われたその後俺は目が覚めた。だがニュータイプには本当に覚醒していた。その後は家の書庫で魔術の本をあさつていた：まあ殆ど使えなかつた。

でも諦めず続けたそんなときだ
「バナージ、これはどう？」

「これは？」

それには見覚えがあつた。『投影魔術』F a t eなら衛宮士郎、サーヴァントエミヤが使う魔術まあやつてやるかと思い投影（トレース）をしたが「あれ？」

そもそも発動していなかつたそういういえば本には人それぞれに投影できるものとできないものがあつたと気づき試しに、ガンダムユニコーンのビームマグナムを投影したら：できたしかも弾も俺は試しうちに父さんが魔術で結界を貼り的をつけてもらいうつと：なんと威力は同等かそれ以上だつた！

父さんに聞かれ

「あの武器はあんなに威力が出るのか!?」

「オリジナルはそうだけどこれは投影で作つたものだから、威力が落ちてないとおかしいんだよ」

「なんだつて…」

それを聞いたときの親はマジでヤバかつた、結果投影魔術はあまり使うなと言われたもちろん承認した

理由は完全に俺が封印指定の対象になつちまうからだまあそれから長い月日が流れて今は時計塔に魔術の勉強をしているもちろん投影魔術は使つてない。

俺はある人物がいるドアの前にいる。俺は入る前にノックをする

「ロード・エルメロイⅡ世、バナージ・リンクスです」

「入れ」

俺はロード・エルメロイⅡ世の部屋へ入る

「あのあの頼み事とは?」

「君も一度は耳にしていると思うが、カルデアに行つてマスターになつてほしい」

それを聞いて俺は驚いた、なぜ俺が?

「何で、俺なんですか!? もつと他に…」

「正直に言おう、君しか頼れる人がいないからだ」

「え?」

……冷静に考えようロード・エルメロイⅡ世には遠坂凛と言う教え子がいる、彼女は一回聖杯戦争に参加しているからマスターをしたことがあるはず。でも教え子を向かわせるわけには行かないか。

：俺しかいないじやん！いや、士郎さんがいるでしょう！…あ、今日本に帰つていな
いんだつた：俺しかいないじやん

「わかりました、すぐに準備します」

「すまないな」

「いえ、失礼しました」

さてと早く家に戻つて色々準備しないとな

続
く

始まる原作

ロード・エルメロイⅡ世からカルデアのマスターになつほしいて言われてから数日がたつた。正直に言う。

何で、こんな寒いところにあんの？ マジできつかつたもう一種の登山だよ……いや登山だつた。

服装はカルデアのマスターの服装だけどその上からバナージが来ていた。パーカーを着ている正直に言うと暑い

長袖に更に長袖のパーカーはきつい。あ、ユニコーンは全長を変えることができ最大でアニメと同じ大きさ、最小で2メートルだ……誰に言つてるんだ俺？ あとNT-D発動時のサイコフレームの色も変えられる

「そろそろ、オルガマリー所長の説明会だつたな」

そう思い中央管制室に向かう：あれ？ これつて：始まつたかそう思い俺は扉の前まで行き入る

そして長い長いオルガマリー所長の話が始まつた：いや長すぎる。正直眠くなつてきたん？ あ、オルガマリー所長にビンタされた：じゃああれが藤丸立香か髪は黒、と言

う事は男か、あ追い出されたさてと話を聞かないと——そう思つた瞬間少し頭痛が走る
「つ！」

俺はオルガマリー所長の方を向きがむしやらに走り出した他のマスター候補の人を
退かしながらそして

高く飛びオルガマリー所長を押す

「きや！バナージ！一体何を…」

オルガマリー所長が言い切る前にオルガマリー所長がいた場所が爆発する
ボガアーン！

「え？」

「く、ユニコーン！」

俺は爆風で壁に当たりそうになるがすぐにユニコーンを体に纏い衝撃を抑える

「か、カルデアが」

「これは、」

すでにカルデアは火の海となつていた、あたりは燃え爆発の衝撃で崩壊し前の姿は見

る影もない

まさに地獄絵図

「ば、バナージその姿は!?」

「話はあとですオルガマリー所長！他に生存者がいなか確かめに行きます！ここで待つていてください！」

「ま、待ちなさい！」

俺はオルガマリー所長の静止を聞かず扉をこじ開け走るだがやはり他の場所も火の海となっていた。

「やつぱり誰もいないのか…」

絶望していた俺だが建物の壊れた残骸からカプセルのようなものを見るける

「これは」

俺はすぐに残骸をどかすとそこには人が入っていたしかも見覚えのある顔それは—
—オフエリアだつた

「つ！オフエリアさん！」

俺はすぐに開けようとするがびくともしない

「くつ、なら投影、開始（トレースオン）」

ユニコーン状態ではビームサーベルが使えないためビームサーベルをトレースする

「投影、完了（トレースオフ）」

俺はビームサーベルを展開しオフエリアに当たらないように上の部分を切り
そして成功しオフエリアを抱き上げる

「オフェリアさん！」

「う、その声はバナージ」

彼女は目を開けるん？あれ俺の姿でユニコーン

「え？」

まあ、だろうね起きてこんな真っ白いなにかに抱き上げられてるんだもね

「あなた、バナージ？」

「あ、ああ俺だ」

俺はユニコーンを解除し素顔を見せ 「バナージ！」 ウエ！？

なんと急にオフェリアに抱きつかれた

「会いたかったよ…バナージ…」

「え、あ？あえ、」

え？え？なんで俺抱きつかれてんの？…まさかあれか——俺に好意持つてたパ

ティーン？

「とりあえず、オルガマリー所長の所まで

「わかつた！」

急いで俺とオフェリアは走り出しオルガマリー所長がいる中央管制室まで行つた

「所長！戻りました！」

「バナージ！それにあなたはオフェリア!?」

「オルガマリー所長お久しぶりです」

「あなた大丈夫なの!?」

「はい」

そんなことを話していると機械的な声がなる

『レイシフト開始まで、3、』

「レイシフトだつて!?」

「コンフィンのない状態で!?」

『2、1』

「取り敢えず一つに固まりましょう！」

「ちょ、ちょっとまつて私、マスター素質は——」

『0、全行程完了。ファーストオーダー、実証を開始します』

その機械的な声を最後に意識は消えた、

そして目が覚めると燃える街が目にはいつた

「ここは？」

「ここがレイシフトした特異点？」

「ど、どうして」

「?!」

声がする方に俺とオフェリアが振り向くとそこには——マスターの適性がないオルガマリー所長がいた

「な、なんでしょ所長がここに」

「私が知るわけ無いでしょ！でもほんとにどうして」

「まさかユニコーンが他の人物に影響してオルガマリーのマスター適性の可能性を広げた？」

俺は心のなかでそんなことをがん考えていたがすぐに周りを見るだがあたりは変わらず燃え建物は壊れて廃墟となつていて、すると手首につけていた通信機が鳴る、そして出るとそこにはロマニがいた

「ロマニ！」

【無事みたいだねバナージくんて、オフェリア!?な、なぜ彼女がそこに!?】

「はあ!? 何であなたが仕切っているの、ロマニーレフは!? レフはどこ!? レフを出しなさい！」

「うひやああつ!! しょ、所長生きておられたんですか！」

「ええ、バナージのおかげでさあレフを出しなさい！ ロマニーレフを出しなさい！」

【…とても言いづらいですが聞いてください】

ロマニーから告げられた言葉は俺やオフェリア、所長を絶望に追いやつたカルデアは半壊レフは行方不明となっていた。更にスタッフの生き残りはわずか二十人にも満たないようだ、更に絶望は加速するマスター候補生は俺とオフェリア、ロマニーから聞いた藤丸立香以外の全員が危篤状態しかも医療器具はない。

【と、これが今のカルデアの状況です】

【…ロマニ、マスター候補生を凍結保存すればまだ助かるかもしけないぞ】

【そ、そうか！ その手があつた！ すぐに実行しよう！】

通信はそれを最後に切れた、さてと行動開始だ

【移動しましよう、拠点となる場所も必要ですしそれにできれば靈脈を見つけてサー・ヴァントを召喚したいです】

【そうね、バナージの意見に賛成よ】

【私も異論ない】

続
く

俺たちはすぐに行動を始めた：あ、ロマニにどこに靈脈があるか聞けばよかつた